

大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 70 集

長岡京跡右京第 1273 次調査報告



2024

大山崎町教育委員会

大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 70 集

長岡京跡右京第 1273 次調査報告



2024

大山崎町教育委員会



1 検出遺構と調査地の周辺 (南から)



2 4トレンチ出土鳥紐蓋 (右側面から)



3 4トレンチ出土鳥紐蓋 (左側面から)



4 4トレンチ出土鳥紐蓋 (正面から)



5 ビットP447の検出状況 (西から)



1 6トレンチ礫が主体の整地道構の検出状況 オルソ画像 (北から)



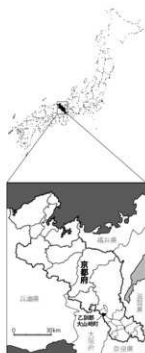
2. 6トレンチ東半 SX614 検出状況 (南から)



3. 6トレンチ東半 SX614 完掘状況 (南から)

例 言

1. 本書は、大山崎町教育委員会が令和4年度に実施した原因者負担による発掘調査の報告書である。
2. 座標系は、日本測地系の第6座標系を主として用いた。これは、これまでの調査成果との整合性を重視したためである。ただし、世界測地系の座標を併記している。両測地系の座標値は、相互の変換作業は行わず、それぞれ実地に設置した既存点から実際に測量して求めた。
3. 調査回数については、以下の略号を用いた。
長岡京跡・宮城 (P)、左京城 (L)・右京城 (R)、山城国府跡 (K)・山崎津跡 (T)・山崎城 (YJ)。本書で調査回数の区分を表す場合は、上記の括弧内に示したアルファベットの略称を用いる場合がある。
4. 各調査回数に付された地区名については、高橋美久二1977「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要1977』)による小字名を基にしたアルファベット表記の地域区分に準じ、同一地区内における調査の回数は、アラビア数字を末尾に付して示している。
5. 地形区分については、「1:25,000土地条件図京都南部」(国土地理院1966年印刷)、「長岡京市域地形分類図」(『長岡京市史』資料編一付図2,1991年)を参照した。
6. 本文中で表記した「西国街道」は特に断らない限り府道西京高槻線を指す。
7. 発掘調査では、以下の方々の参加・協力を得た。
株式会社サポートスタッフ
調査整理員：天谷明子・岡本弓美子・坂林彩也・村上優美子
8. 本書の作成は、大山崎町教育委員会事務局 生涯学習課 文化芸術係が担当した。古閑正浩・原田早季子・八木麻里の助言と協力を得て、編集・執筆は、菅生薫が担当した。
9. 表紙のカットは、長岡京跡右京第1273次調査出土の鳥紐蓋 報告番号52(縮尺2分の1)である。



本文目次

1. 令和4年度における発掘調査	1
2. 長岡京跡右京第1273次(7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区)調査報告	1
1. 位置と環境	1
2. 調査経過	3
3. 基本層序	3
4. 検出遺構	5
(1) 中世の遺構	5
(2) 古代の遺構	8
5. 出土遺物	18
(1) 1トレンチ	18
(2) 2トレンチ	18
(3) 3トレンチ	18
(4) 4トレンチ	18
(5) 5トレンチ	20
(6) 6トレンチ	20
(7) 7トレンチ	22
(8) 8トレンチ	22
6. まとめ	22
(1) 1トレンチ・2トレンチ・2-2トレンチ・3トレンチ	22
(2) 4トレンチ	22
(3) 5トレンチ	23
(4) 5-2トレンチ	23
(5) 6トレンチ	23
(6) 7-8トレンチ	28
(7) まとめ	29
7. 烏紐蓋の製作技法の分析と分類私案	30
付録 遺物観察表	40

1. 令和4年度における発掘調査

大山崎町教育委員会が令和4年度に実施した調査は2件である(表1)。このうち、開発等の工事に伴う原因者負担の調査が1件(表1、番号1)、国庫補助事業による調査が1件であった(表1、番号2)。本書では、このうち、前者の調査成果を収録する。

長岡京跡右京第1273次調査では、奈良時代後半に位置づけられる遺構面に伴う遺物包含層から、猿投窯跡群産の灰釉陶器で全国的にも出土例が少ない鳥紐蓋が出土した。この鳥紐蓋は本遺跡の性格を知るうえで重要であるため、出土例の集成を行うとともに製作技法についての考察を試みた。

さらに、中世の遺構として、井戸、正南北に並ぶ溝群などを検出した。また、礎が主体の整地遺構を検出した。この整地遺構は既往の周辺調査でも類似した遺構が検出されており、その用途についてさまざまな試案が重ねられてきた。当地は、11世紀には存在した円明寺の推定地に隣接しており、円明寺は、西園寺公経が寛済法師(生没年不詳)から譲られた後、山荘となったことで知られる。検出した遺構は、円明寺の荘園開発の実態を知るうえで重要な遺構である可能性がある。

2. 長岡京跡右京第1273次 (7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区)調査報告

調査地 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字西法寺1-1・2-1・3-1・4-1・5-1・9-1・62・62-1、小字里ノ後26-1・26-6・27-1

調査期間 令和4年12月8日～令和5年3月30日

調査面積 390㎡

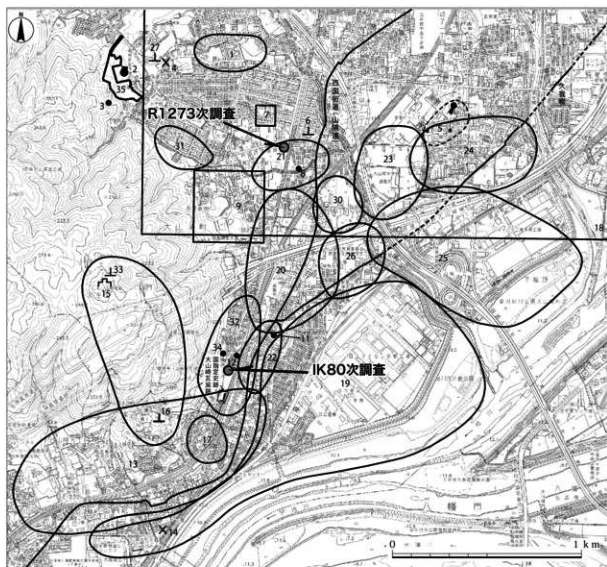
1. 位置と環境

当該地は、標高25.5m～27.7mの扇状地に立地する。調査地の南には久保川が東北東に流れ、桂川の支流である小泉川に注ぐ。長岡京の条坊復原によれば、長岡京跡右京九条二坊十七町・十八町にあたり、また、縄文時代～中世の久保川遺跡にも含まれている。周辺では、調査地の東側で実施されたR735・R786・R884次調査において、古代の庭園の洲浜と評価された「礎敷き遺構」が検出され、火付け木やヒノワ様の文様を記した墨書石が出土した。また、久保川の南側で行われたR873次調査では、奈良時代後半の土器21点に、「大宅」、「麻呂」、「大」、「宅」、「富」といった墨書が確認された。こうした調査成果からは、当地を一定の社会的階層に属する識字層が占地していた状況が見てとれる。

また、当地の西には円明寺が位置している。円明寺は11世紀中頃には存在していたと考えられており、13世紀前半には西園寺公経による円明寺山荘の経営が始まった。こうした荘園開発に関すると考えられる遺構は散在的に検出されているが、その全体像は不明な点が多い。

表1 令和4年度発掘調査一覧

番号	調査 回数	地区名	調査地	調査 機関	調査 面積	原因者	調査 期間	所収
1	長岡京跡右京 第1273次調査	7ANSSR-10・ SSZ-9地区	大山崎町字円明寺小 字里ノ後26-1、26-6、 27-1 西法寺1-1、2-1、 3-1、4-1、5-1、9-1、 62、62-1	大山崎町 教育委員会	390㎡	宅地造成に伴う発掘 調査	221226 ～230330	
2	第80次 遺跡確認調査	7YYMS' SS-16地 区	大山崎町字大山崎小 字白味才42-1	大山崎町 教育委員会	53㎡	範囲確認調査 (国庫補助事業)	230220 ～230331	大山崎町 第69集 (2023年)



遺跡名

1 脇山遺跡	8 里の後古墳	山城国府跡	18 長岡京跡	25 下植野南遺跡
2 鳥居前古墳	9 円明寺跡	山崎院跡	19 山崎津跡	26 算用田遺跡
3 小倉古墳	11 傍示の木古墳	山崎駅跡	20 百々遺跡	27 鳥居前遺跡
4 石倉集石遺跡	12 白味才古墳	14 山崎橋跡	21 久保川遺跡	30 金藏遺跡
5 境野古墳群	13 大山崎遺跡群	15 山崎城跡	22 堀尻遺跡	31 西法寺遺跡
6 葛原親王塚遺跡	河陽離宮跡	16 銭原遺跡	23 松田遺跡	32 白味才遺跡
7 葛原親王屋敷跡遺跡	相応寺跡	17 山崎遺跡	24 宮脇遺跡	33 古城遺跡
34 白味才西古墳	34 鳥居前西遺跡			

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』（第3版）に準じたため欠番が存在する。

第1図 大山崎町遺跡地図と令和4年度に実施した調査地 1:20,000

2. 調査経過

本調査は宅地造成に伴う事前調査として実施した。調査地全体に任意の地区割りを設定し、数字（南北方向）とアルファベット（東西方向）で表記した基軸を設け、それぞれ3m単位で割り付けた。地区名は、当該地区の四隅のうち北西の基軸交点の名称で表記した。この任意座標の国土座標に対する振れ角は $12^{\circ}34'12''$ である。調査は令和4年12月8日に開始し、令和5年3月30日に終了した。

3. 基本層序

本調査地では、トレンチごとに土層の堆積状況が大きく異なる。そのため、基本層序はトレンチごとに設定し、記述する。そのため、記述上で「第6層」と表現しているものでも、1トレンチのそれと4トレンチのそれは同一のものではない。ただし、第1層～第4層及び第8層についてはトレンチ横断的に性質が類似する層序として把握し、共通する層名を付したので先に記述する。

第1層は、黒褐色壤土層であり、現在の田畑地表面を形成する層である。

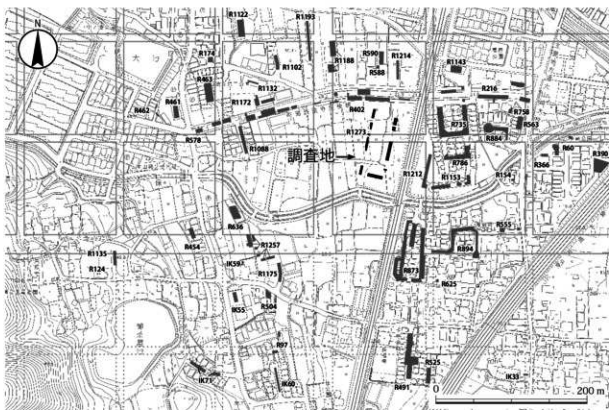
第2層は、橙褐色粘質土であり、現在の田畑に対応する床土層である。

第3層は、灰色粘質土であり、旧耕土層である。

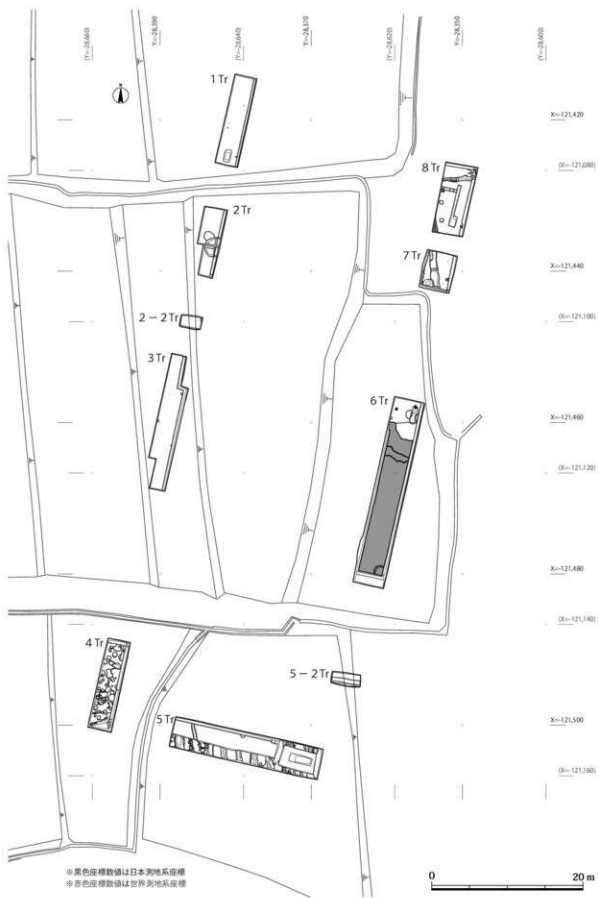
第4層は、橙灰色粘質土であり、旧耕土層に対応する旧床土層である。

第8層は、黄褐色～灰褐色の粘性の砂礫層であり、当該地の地盤を形成する堆積層である。

第5層以下はトレンチごとに記述する。なお、他のトレンチとの関連で欠番とした層がある。



第2図 周辺の調査と調査位置図 1:1,500



第 3 図 トレンチ全体図 1:500

1トレンチ・2トレンチ・2-2トレンチ 第5層は灰黄色粘質土～灰褐色砂礫である。色調と砂粒の大小により5a～5d層に分層した。第6層は暗灰色～灰褐色粘質土であり、含有する礫の量により6a層と6b層に分層した。2トレンチにおいて遺構面は第5層上面である。

3トレンチ 第6層は灰色粘質土である。

4トレンチ 第5層・第6層は、灰色粘質土で、第6層には土師器片などの遺物を少量含む。第7層は、暗褐色粘質土である。遺構面を覆うように形成された、遺構に伴う包含層である。含まれる角礫の量により7a層と7b層に分層した。遺構面は第8層上面である。

5トレンチ・5-2トレンチ 第5層は明黄灰色～暗灰色砂礫である。色調と砂粒の大小により5a層と5b層に分層した。第6層は明褐色粘土～暗灰色粘質土である。粘土の粒度や含有する砂粒の大小、粘土の密度により6a～6f層に分層した。遺構面は第6層上面と第8層上面である。

6トレンチ 第6層は、暗灰色粘質土～青灰色粘土である。粘土の粒度や含有する砂粒の大小、粘土の密度により6a～6c層に分層した。遺構面は第8層上面である。

4. 検出遺構

(1) 中世の遺構

(2トレンチ)

井戸 SE201 調査区中央で検出した円形の素堀井戸である。遺構面では直径3mを測るが、検出した第8層上面では直径2.6mである。埋土はSE201a～SE201dの4層に分層でき、SE201b～SE201dで遺物が出土した。

井戸 SE202 SE201に先行する素堀井戸である。埋土は2層に分層でき、第1層は暗黄褐色粘質土、第2層は暗褐色粘質土である。埋土から遺物は出土しなかった。

(5トレンチ)

溝 SD501～SD511 第6a層上面において検出した溝群であり、幅0.6m～1.4m、深さ0.1m～0.32m、溝の心々間隔は0.6m～2.1mを測る。溝群の走向は平均N5°58'53"Wである。溝の底面は平均0°25'0"で南に下がるが、SD504、SD506、SD507は北に下がる。溝の埋土は明灰色～橙褐色の極細粒砂～砂質土であり、逆級化層理を呈することから、洪水により埋没したと考えられる。溝はそれぞれ並行し、粘度が高く水はけの悪い粘土層を掘り込んで規格的に配置されている。トレンチ西側では畝状の部分に直径10cm程度の足跡状の痕跡を検出した(図版3-3・4)。

溝 SD512 第8層上面で検出した溝である。走向はN5°8'31"Wである。

(6トレンチ)

土坑 SK601 第8層上面で検出した土坑であり、長軸1.18m、短軸0.84m、深さ0.26mを測る。底面に角礫が散在する。土坑埋没時に廃棄されたと考えられる。瓦器が出土したSK602と近接し、長軸の走向を同じくするため、中世の遺構と考える。

- 土坑 SK602 第 8 層上面で検出した土坑であり、長軸 0.8m、短軸 0.6m、深さ 0.24m を測る。
- ビット P603 第 8 層上面で検出したビットであり、径 0.3m を測る。遺構上面に拳大の角礫が載る。隣接する柱穴 P606 に伴う柱据付け穴と考えられる。
- ビット P605 第 8 層上面で検出した土坑であり、径 0.3m、深さ 0.56m を測る。
- ビット P607・P608 第 8 層上面で検出したビットであり、P607 は径 0.7m、深さ 0.23m、P608 は径 0.8m 深さ 0.16m を測る。P608 には拳大の角礫が複数廃棄される。
- 柱穴 P604・P606 第 8 層上面で検出した柱穴であり、P604 は直径 0.36m、深さ 0.56m、P606 は直径 0.26m、深さ 0.46m を測る。柱穴の心々間隔は 2.6m である。中軸は N 84° 33' 21" E の振れ角を測る。底部に掘立柱の柱根があり、根固めはされていなかった。埋土から遺物は出土しなかった。
- 整地遺構 SX610・611 第 8 層上面に堆積する整地遺構であり、整地遺構上面に生活面が形成される。遺物の細片を含み、瓦器が出土した。平坦面と南側に下がる緩斜面を形成する。
- 整地遺構 SX613・617・619 第 8 層上面に堆積する整地遺構である。礫や遺物をあまり含まない。
- 整地遺構 SX612・SX614・SX615 拳大以下の大量の垂角礫と砂粒をやや多く含む粘質土に遺物を多く含み、固く叩き締められている。直下の第 8 層は粘土質で礫をあまり含まず、しまりも強くないことから、SX614 は人為的な遺構と判断した。検出面において礫が多く表出するため礫敷き状を呈するが、遺物が多く含まれ、礫が凹凸を呈しまばらであることから、礫が敷き詰められた状況を作り出そうという意識よりも、固形物で整地面を作り出そうという意識の方が優位であるとする。そのため、礫敷きという言葉は用いず「礫が主体の整地遺構」と呼ぶ。
- 整地遺構 SX616・SX618・SX620 6 トレンチで検出した整地遺構である。出土遺物は皆無に近く、時期は不明である。

(7 トレンチ)

SD701 南北方向の溝で、走向は N 4° 46' 30" W である。埋土は緑灰色粘質土である。

(8 トレンチ)

SD801 トレンチ北側で検出した東西溝であり、走向は N 88° 3' 54" E である。埋土は粘度の高い暗灰色砂質土である。

SD809 トレンチ南西端で検出した南北溝であり、走向は N 11° 2' 6" W である。7 トレンチで検出した S D 701 と埋土や走向が類似しているため同一遺構と考えられる。

P 807・808・810 トレンチ南側で検出したビットである。

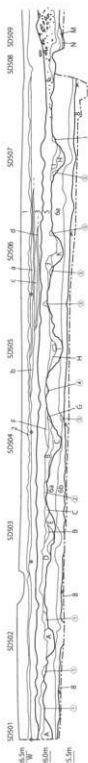
SX811 トレンチ北東端で検出した溝状の遺構である。トレンチ外に広がっている。

(2) 古代の遺構

(4 トレンチ)

SK405・SK409・SK417 第 8 層上面で検出した円形から隅丸方形の土坑である。南北方向に一直線に並び、主軸は N 6° 50' 31" E の振れ角を測る。土坑の心々間隔は SK405 と SK409 が 1.6m、

5T1北壁



第3層については、黒褐色の土層と黒褐色の土層が交互に堆積していたため、3a、3bに分割した。これらの層は土層と柱状土によるものと考えられる。第3層全体にわたって互層が認められたが、図記は一部にとり、その略記を以下に示す。

- ① 灰色砂質土(φ5mm以下)
- ② 灰色砂質土(φ0.1mm以下)
- ③ 黒褐色砂質土(φ1mm以下)
- ④ 黒褐色砂質土(φ0.1mm以下)
- ⑤ 黒褐色細粒砂

5T1

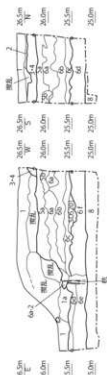
- 1 1
- 2 2
- 3 3
- 4 4
- 5 5
- 6a 6a
- 6b 6b
- 6c 6c
- 8 8

- 灰色土(層土)
 1 灰色土(層土) (b)
 2 黒褐色土(層土) (b)
 3 黒褐色土(層土) (b)
 4 黒褐色土(層土) (b)
 5 黒褐色土(層土) (b)
 6a 黒褐色土(層土) (b)
 6b 黒褐色土(層土) (b)
 6c 黒褐色土(層土) (b)
 8 黒褐色土(層土) (b)

SD501~SD511層土

- A 灰色・褐色のまだら砂質土(φ0.1mm以下)
- B 灰色砂質土(φ0.5mm以下)
- C 灰色砂質土(φ0.1mm以下)
- D 灰色・褐色のまだら砂質土(φ0.5mm以下)
- E 黒褐色細粒砂
- F 黒褐色砂質土(φ1mm以下)
- G 黒褐色砂質土(φ0.5mm以下)
- H 黒褐色砂質土(φ0.1mm以下)
- I 黒褐色砂質土(φ1mm以下)
- J 黒褐色砂質土(φ1mm以下)
- K 黒褐色砂質土(φ0.1mm以下)
- L 黒褐色砂質土(φ0.1mm以下)
- M 灰色・黒褐色の砂質土(φ0.1mm以下)
- N 灰色・黒褐色の砂質土(φ0.1mm以下)
- O 黒褐色細粒砂
- P 黒褐色土(φ0.5mm以下)

5-2T1南壁



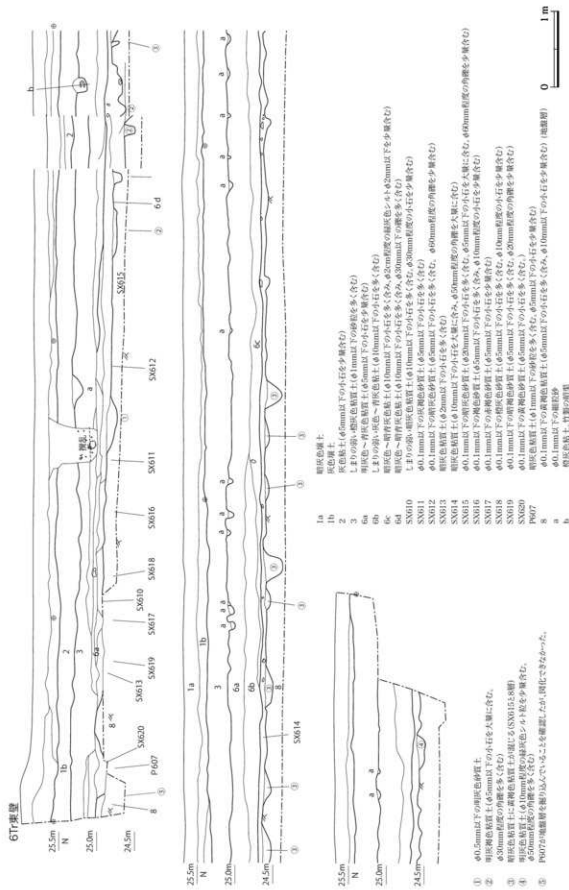
5-2T1

- 1 1a
- 2 2a
- 3 3a
- 4 4a
- 5a 5a
- 5b 5b
- 6a 6a
- 6b 6b
- 6c 6c
- 6d 6d
- 6e 6e
- 6f 6f
- 8 8

- 黒褐色土(層土)
 1 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 1a 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 2 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 2a 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 3 灰色・黒褐色の砂質土(φ0.1mm以下)
 3a 灰色・黒褐色の砂質土(φ0.1mm以下)
 4 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 4a 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 5 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 5a 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 5b 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6a 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6b 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6c 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6d 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6e 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 6f 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 8 黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 φ0.1mm以上の砂質土を含む黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)
 φ0.1mm以上の砂質土を含む黒褐色土(層土) (φ5mm以下の小石を少量含む)

第7図 5トレンチ・5-2トレンチ断面図 1:80



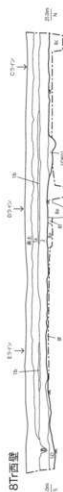
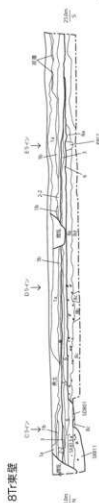
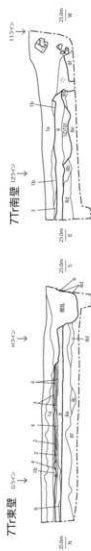


第8図 6トレンチ断面図 1:50

- 1a 黒土灰褐色層土
 1b 暗褐色層土
 2 暗褐色腐植砂質土(φ1mm以下)の砂を多く含む(含む)(自腐土)
 3 明褐色腐植砂質土(φ1mm以下)の砂を多く含む(含む)(自腐土)
 3' 暗褐色腐植土(φ1mm以下)の砂を多く含む(含む)(自腐土)
 4 暗褐色腐植土(φ1mm以下)の砂を多く含む(含む)(自腐土)
 4' 暗褐色腐植土(φ1mm以下)の砂を多く含む(含む)(自腐土)
 5 腐植土(φ30mm程度の礫を多く含む、マンガンを含む)を含む
 6 暗褐色砂層(φ0.5mm以下)の砂質土(φ20mm以下)の
 小石を大群に含む、特に東部北部2mではφ150mm以下の
 小石を大群に含む(東部北部2mではφ50mm以下の小石を多く含む、
 φ20mm以下の小石を少量含む)(埋藏層)
 8a 40.1mm以下の灰褐色腐植土(φ50mm以下の小石を多く含む、
 φ0.5mm以下の灰褐色腐植土(φ50mm以下の小石を多く
 含む、φ0.5mm以下の灰褐色腐植土(φ50mm以下の小石を多く
 含む)(埋藏層))
 8b 40.1mm以下の暗褐色砂層(φ10mm以下の小石を大群に含む)(埋藏層)
 8c 40.1mm以下の灰褐色腐植土(φ1mm以下の砂を多く含む)
 8d 暗褐色腐植土(φ50mm以下の小石を少量含む、φ20mm以下
 の小石を多く含む)

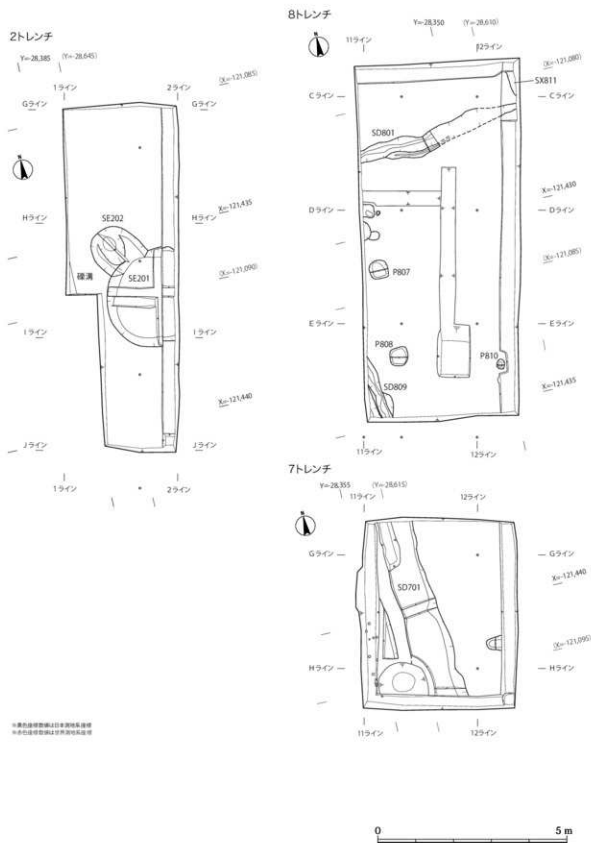
1a 1b
 2 3
 3' 4
 4' 5
 6 8a
 8b
 8c
 8d
 8e
 8f
 8g
 8h
 SD
 SD1001

石垣跡に伴う遺構物 ①-⑩

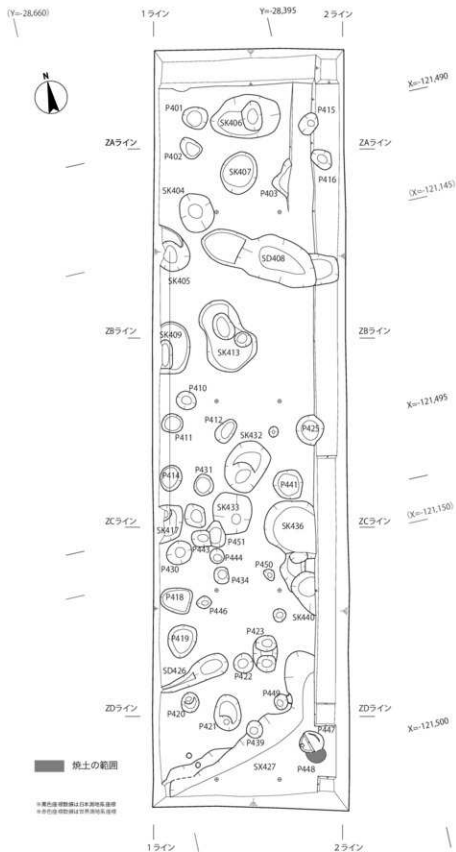


第9図 7・8トレンチ断面図 1:80

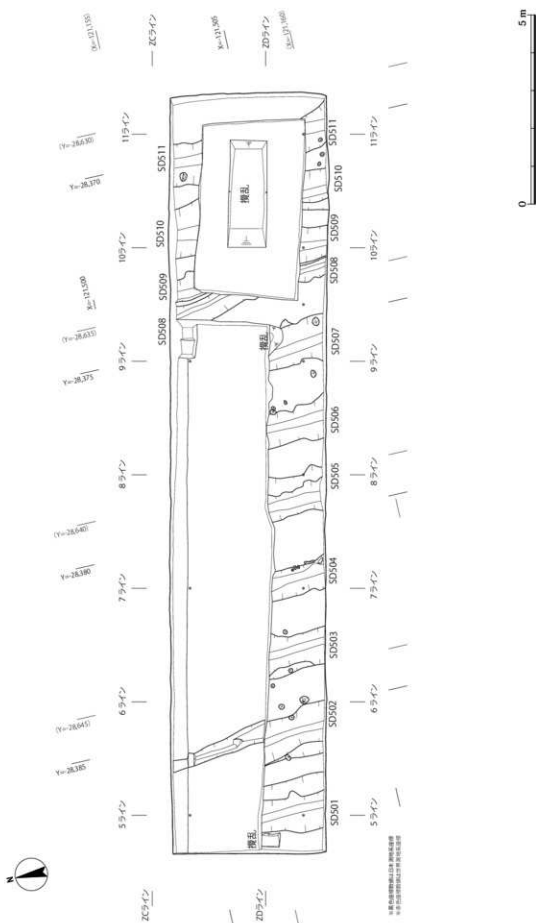
0 2 m



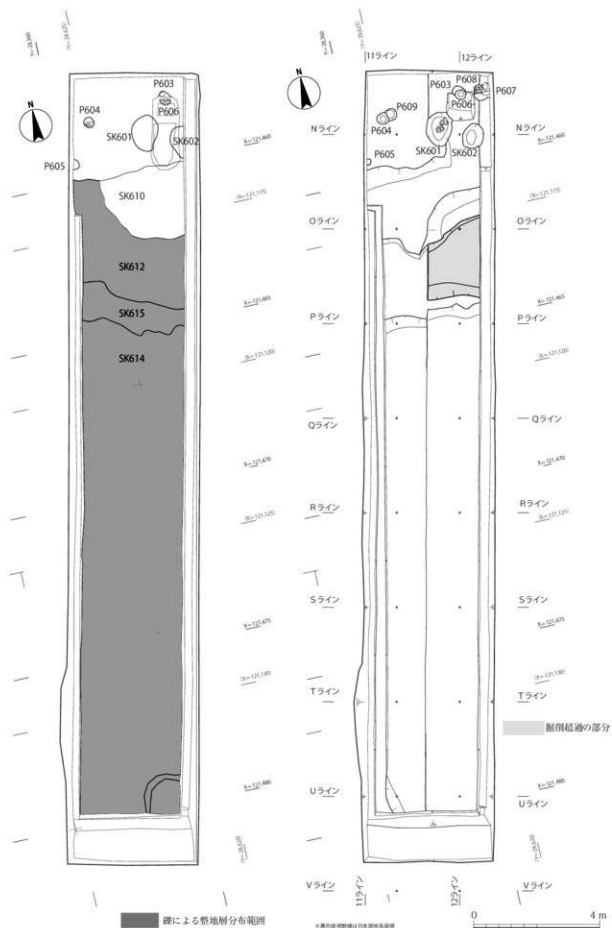
第 10 図 2・7・8 トレンチ平面図 1:100



第11図 4トレンチ平面図 1:60



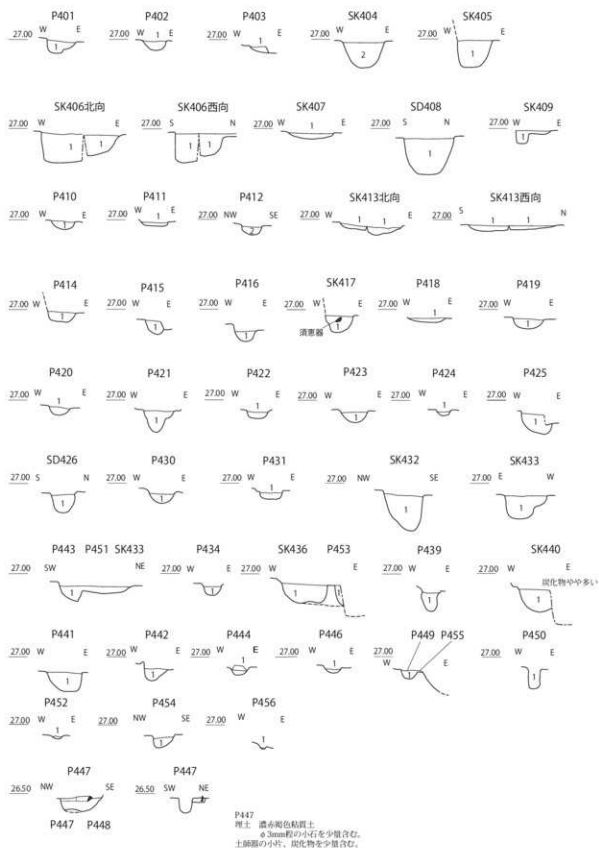
第 12 図 5 トレンチ平面図 1:100



第13図 6トレンチ平面図(左: 整地遺構掘削前 右: 整地遺構掘削後) 1:120



第 14 図 2・6・8 トレンチ遺構断面図 1:50



- 1 暗褐色粘質土(φ3mm以下の小石を多く含む、φ10mm程度の小石を少量含む、炭化物を少量含む。)
 2 暗褐色粘質土(φ3mm以下の小石を多く含む、φ10cm程度の鏝が入る。)
 炭化物は含まないか、極めて少ない。



第15図 4トレンチ遺構断面図 1:10

SK409 と SK417 が 2.8m である。完掘状況から柱穴の可能性がある。

SX427 第 8 層上面で検出した落込み状遺構である。深さ 0.42m を測る。

ピット P447 落ち込み状遺構 SX427 において、第 8 層上面で検出した飛鳥時代の甕が倒置された据え付け穴である。隣接して焼土を検出した。

その他 4 トレンチでは大小の土坑・ピット・溝を多く検出した。

5. 出土遺物

本調査で出土した土器をトレンチごとに報告する。なお、年代観について、奈良時代の土器については奈良国立文化財研究所 1976 を、平安時代以降の土師器については平尾 2019 を参考にした。

(1) 1 トレンチ

須恵器、製塩土器、瓦器が出土したが、極めて少量であり、図化できるものはなかった。

(2) 2 トレンチ

井戸 SE201 (第 16 図 1～8) SD201c 層から土師器 (1～4)、須恵器、瓦器 (5～7)、鉄製品 (8)、白磁が出土した。1 は皿 N である。内面の底部外縁にはナデをめぐらせる。底部外面はヘラオコシのち未調整である。5 B 期のものと考えられる。2 は土師器皿である。底部外面は未調整か軽いユビオサエまたはナデである。3 は土師器皿である。口縁部外面にケズリを施し、底部外面は未調整か軽いユビオサエまたはナデである。4 は坏または椀の高台である。5 は瓦器椀の底部である。6 は瓦器椀の底部である。高台は貼付高台で、断面は台形に近い三角形を呈する。7 は瓦器椀である。口縁部は内湾し、口縁端部はやや外側にひらく。内面には沈線がめぐる。器壁が薄く、内面には 2mm 程度の暗文を緻密に施す。細片のため産地や時期の特定は困難であるが、比較的古相の特徴をもつ。8 は鉄製品である。刀子の可能性がある。

(3) 3 トレンチ

須恵器、土師器が出土したが、極めて少量であり、図化できるものはなかった。

(4) 4 トレンチ

コンテナ 13 箱分の遺物が出土した。

包含層 7a 層 (第 16 図 9・10) 9 は須恵器皿である。内面はナデ、外面は工具によるナデを施す。

10 は灰軸陶器皿である。高台は貼付高台である。図に示したほか、土師器、須恵器杯身・杯蓋・甕、緑軸陶器、製塩土器が出土した。

包含層 7b 層 (第 16 図 11～23) 11 は土師器杯 A である。12 は土師器皿である。底部内面から体部外面にかけてナデを施し、底部外面はケズリで調整する。13 は土師器甕である。口縁部はナデ、体部内面はケズリで調整する。屈曲部にはハケメがわずかに残る。14 は土師器甕である。体部内面にはユビオサエが残り、外面にはハケが施される。15 は須恵器蓋である。口縁部が屈曲する A 形態であるが、屈曲の度合いは非常に緩やかである。16 は須恵器杯 B 身である。口縁部外面はナデによりやや外反する。高台は貼付高台であり、底部と体部の境よりも内側に取り

付く。17は須恵器鉢である。ナデにより口縁端部が上方に引き出される。18は須恵器壺である。口縁部と体部の境に沈線が巡る。19は須恵器壺である。口縁部外面には断面半円形の突線がめぐる。20・21は製塩土器である。22は平瓦である。凹面には布目があり、糸切り痕がのこる。凸面は押圧技法で調整される。端面および凹面の端面付近はヨコケズリで調整する。23はナイフ形石器である。図に示したほか、土師器、須恵器杯身・杯蓋・甕・壺、製塩土器、黒色土器が出土した。須恵器では、MT15型式の杯身が1点出土した。

土坑 SK405 (第16図24・25) 24は土師器杯Aである。25は須恵器杯B身である。高台は貼付高台であり、底部と体部の境に取り付く。底部外面は工具等によるナデを施す。

土坑 SK406 (第17図26～29) 26は土師器皿である。赤褐色の精良な胎土で成形されている。内面はミガキ、底部外面はケズリで調整され、体部外面にはヨコナデの明瞭な擦痕が残る。27は須恵器壺である。高台は貼付高台であり、底部と体部の境に取り付く。28は須恵器壺である。体部には自然軸が付着する。29は製塩土器である。

溝 SD408 (第17図30～32) 30は土師器甕である。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。外面にはハケが施される。31は須恵器杯蓋である。口縁部が屈曲するA形態であり、口縁部端には重ね焼きの痕跡のある自然軸が付着する。32は黒色土器である。内側のみが黒いA形態である。体部外面にはケズリを施し、内面にはミガキの痕跡が残る。

土坑 SK413 (第17図33～35) 33は土師器鍋または甕の把手である。34は須恵器杯蓋である。口縁部が屈曲するA形態であるが、屈曲の度合いは緩やかである。35は須恵器甕である。内外面をナデで仕上げ、口縁部は内湾しながら丸くおさめる。

ビット P425 (第17図36) 土師器杯蓋である。つまみは厚みがあり、頂部は平坦である。

不整形土坑 SX427 (第17図37・38) 37は土師器皿である。胎土に赤褐色粒を多く含む。38は土師器鍋または甕の把手である。外面にはハケが施される。

不整形土坑 SX428 (第17図39～41) 39は須恵器杯A身である。ナデにより外反して立ち上がる。底部には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。40は須恵器杯蓋である。口縁部が屈曲するA形態であるが、屈曲の度合いは緩やかである。内面の一部はユビナデの後に工具等によるナデを施して平滑に仕上げる。41は須恵器壺である。口縁部内面には薄く自然軸がかかる。

土坑 SK432 (第17図42) 製塩土器である。

土坑 SK436 (第17図43・44) 43は須恵器杯A身である。底部から体部外面に火禿が見られる。内面にも黒い線状の痕跡が残る。内面は墨書の可能性があると判然としない。44は須恵器杯B身である。高台は貼付高台である。底部には粘土紐の接合痕が残る。

ビット P438 (第17図45) 土師器甕である。

土坑 SK440 (第17図46) 土師器皿である。口縁部内側には沈線が施される。底部にケズリを施す。

ビット P442 (第17図47) 須恵器甕である。

ビット P447 (第17図48) 土師器甕である。内外面にはハケが良好に残り、口縁部はヨコナデにより仕上げる。落ち込み状遺構 SX427 底面で検出した P447 に倒置されており、P447 に接

して赤変した焼土も検出したため、倒置した甕で加熱調理を行っていた可能性がある。

遺構外 (第 17 図 49 ~ 51, 第 18 図 52 ~ 56) 49 は土師器甕である。外面にはハケが良好に残る。50 は製塩土器である。51 は丸瓦である。凹面には布目とその合わせ目が残し、凸面は縄叩きのあとにナデを施す。端面及び凹面の端面付近にはヨコケズリを、側面にはタテケズリを施す。52 は鳥紐蓋である。4 トレンチの 4b 層掘削中の排土から出土した。蓋部分とくちばし部分、冠羽の先端が欠損する。紐の残存器高は 5.1cm、紐の最大幅 5.2cm である。目は管状の工具を押しつけて表現され、頂部横断面は鋭角に尖る。冠羽は 1 段と考えられる。後頭部の剝離痕跡から、冠羽の突出部分及び頭頂部に粘土を付け足していることが分かる。外面は目より上をヨコケズリ、それより下をタテケズリにより整形し、さらにヘラや板状の工具によるヨコナデで表面を調整し、線刻を施す。内面には前方に湾曲した円錐形の空洞があり、ナデののちにケズリで仕上げる。ナデとケズリの及ばない内面頂部には布目がみられる。また、線刻を施す方向や深さ、伸びやかさは鳥紐蓋の左右で様相が異なり、利き手の違いを反映しているものと考えられる。また、右側面では上半部と下半部で異なる向きとなっており (p.35 第 25 図)、これは、蓋部分が取り付いた状態で施文したことにより、蓋に近い部分は頂部を下に向けて描かなければ描きにくかったことによると考えられる。53 は打製石鏃である。54 ~ 56 はナイフ型石器の未製品および剥片である。54 は瀬戸内技法による翼状剥片である。55 はナイフ形石器製作時の背面調整剥片である可能性がある。56 は翼状剥片である可能性がある。これらの資料は、当該地で石器の製作が行われていた可能性を示すものとして興味深い。

(5) 5 トレンチ

溝 SD511 (第 19 図 57) 土師器皿 S である。内面底部外縁にナデをめぐらせる。10B ~ 11A 期と考えられる。小片のため図化できなかったが、ほかにも製塩土器、瓦器が出土した。

遺構外 (第 19 図 58・59) 58 は須恵器壺である。内外面ともにナデで仕上げ、特に底部外面には強いナデがめぐる。底部はオサエあるいは無調整である。59 は土師器皿 S である。内面・外面とも底部から直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。器壁は薄く、内面底部外周にナデをめぐらせる。10B ~ 10C 期と考えられる。また、第 6a 層上面の溝 SD505 の東側で青磁碗が出土した。

その他、溝 SD506、SD526、溝 SD501 西側の第 6a 層上面から須恵器、製塩土器、瓦器が出土したが、いずれも小片であり、図化できなかった。

(6) 6 トレンチ

6b 層・6c 層 (第 19 図 60 ~ 65) 60 は残存高 2.7cm、復元口径 20cm を測る土師器の羽釜である。内外面をナデで仕上げる。61 は土師器皿である。62 は須恵器壺 L である。外面及び内面上部に薄く軸が付着しており、いわゆる原始灰軸陶器と考えられる。内面には仕上げに使用したと考えられる工具のアタリがある。63・64・65 は瓦器の底部である。63 の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。胎土に混和物が多く、赤色粒・黒色粒・白色鉱物を多く含む点が特徴的である。64 の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。63 と同様胎土に混和物が多く、含有

物も類似する。65の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。63・64に対して胎土は精良で混和物をほとんど含まない。見込みにはハケメが明瞭に残り、高台より外側に螺旋状暗文、高台より内側に平行線状の暗文が施される。図に示したほか、土師器、須恵器の杯・杯蓋・甕・壺、灰軸陶器、製塩土器が出土した。奈良時代後半の遺物と考えられる。

整地遺構 SX610 (第19図66～75) 66は土師器皿である。4C期～5B期に併行する時期のものと考えられる。67・68は須恵器杯蓋である。68・67ともに口縁部をナデで仕上げたA形態のものである。いずれも平城Ⅲ～Ⅴの特徴を示す。69は白磁碗の口縁部である。70は瓦器碗の口縁部である。端部内面には沈線がめぐり、段状を呈する。内外面には1mm程度の暗文が密に施される。71～73は瓦器碗の底部である。71の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。見込みにはハケメが残り、平行する暗文が施される。胎土は6b・c層で出土した63・64に似る。72の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。胎土は黒色粒・赤色粒を多く含み、砂粒は少ない。73の高台は貼付高台で、断面三角形を呈する。胎土の砂粒は少ない。74・75は三足羽釜の脚部である。図に示したほか、土師器甕、須恵器杯蓋・甕、灰軸陶器、瓦、製塩土器が出土した。多くが平城Ⅲ～Ⅴに相当する土器であるが、TK23～MT15に相当する須恵器杯も出土した。

整地遺構 SX611 瓦器の細片が出土した。

整地遺構 SX612 (第19図76) 瓦器碗である。内外面には幅1mm程度の暗文が施される。

整地遺構 SX613 (第19図77～80) 77は土師器甕の口縁部である。78は須恵器杯Bである。体部内外面はともにナデで仕上げ、高台は貼付高台である。79は須恵器皿である。体部から口縁部は内外面ともにナデで仕上げ、底部は工具等によるナデとみられる。80は須恵器鉢である。図に示したほか、土師器、須恵器杯蓋・甕、灰軸陶器、製塩土器が出土した。

整地遺構 SX614 (第19図81～83) 81は土師器皿である。ロクロナデで成形し、体部外面はケズリで仕上げる。82は須恵器壺である。高台の周辺はナデ、底部内面は回転ナデで調整する。83は製塩土器である。胎土に有機物を含んでいた痕跡がある。図版8-2a・bはウマの歯である⁽¹⁾。そのほか、須恵器杯身・杯蓋・甕、緑軸陶器、製塩土器、瓦器、平瓦、円筒埴輪、木片が出土した。木片には加工痕や焼けた痕跡は確認できないが、R735・R884次調査の礎敷き遺構でも火付け木が出土しており、本例も火付け木の一部である可能性がある。

整地遺構 SX615 土師器、須恵器杯身・杯蓋の小片が出土した。

整地遺構 SX616 土師器、製塩土器が出土した。

柱穴 P603・P604・柱穴 P606 製塩土器の細片が1点ずつ出土した。

土坑 SK601 土師器、製塩土器の細片が出土した。

土坑 SK602 土師器甕、製塩土器、瓦器碗の細片が出土した。瓦器碗は63・64・72と同様の胎土であり、断面逆三角形を呈する貼付高台の形態も類似する。

ビット P607 土師器、製塩土器の細片が少量出土した。

ビット P608 須恵器甕、製塩土器の細片が出土した。

(7) 7トレンチ

7トレンチでは遺物は出土しなかった。

(8) 8トレンチ

ビット P807 土師器甕ほか器種不明の土師器小片が出土した。

ビット P808 土師器、須恵器の小片が出土した。

溝 SD809 (第 19 図 84～86) 84 は三足羽釜の脚である。85 は瓦器皿である。86 は、一辺 1.0cm を測る鉄製の角釘である。そのほか、土師器甕、須恵器甕の小片が出土した。

溝 SD813 (第 19 図 87～90) 87・88 は土馬である。87 は右前足と考えられ、端部をケズリにより調整する。88 は尾部と考えられ、側面をケズリにより調整する。89・90 は瓦器椀の底部である。89 は高台が断面三角形で浅い貼付高台である。内面には成形後にナデで仕上げた擦痕が残り、その上から暗文が施される。高台より外側で 2～4 mm の明瞭で緻密な暗文を施し、高台より内側では幅 1 mm の連結輪状の暗文を施す。90 は高台が断面三角形の貼付高台である。

遺構外(第 19 図 91～93) 91 は縄文土器の深鉢である。貼付突帯文がめぐる。92 は須恵器鉢である。

口縁端部外面を工具等によるナデで仕上げる。93 は瓦質土器の鈿部である。

6. まとめ

今回の調査ではトレンチごとに検出遺構の時期や性格が大きく異なっており、それぞれの成果は既往の調査との共通性も見られた。まずはトレンチごとにその成果を概観し、最後に調査全体としてのまとめを行いたい。

(1) 1トレンチ・2トレンチ・2-2トレンチ・3トレンチ

1トレンチと3トレンチでは遺構が検出されなかった。これは後世の削平によるものと考えられるが、削平された契機は2トレンチでの成果から窺い知ることができる。2トレンチで検出した2基の素堀井戸のうち SE202 には遺物を全く含まないことから、比較的短期間のうちに埋没した後、より大型の SE201 が掘削されたと考えられる。SE201 はマンガンの斑文が顕著な第6層を掘り込んでおり、同様の層が1・3トレンチでも確認できる。1・3トレンチでは第6層直下に地盤層があるため、当該地一体が広く削平を受け、灌漑水田となり、水田の廃絶後に井戸が開削されたと考えられる。こうした変遷が、調査地西側に位置する中世円明寺の西園寺家による荘園開発を示すかは明言できないが、当地が農地として開発されていく過程を考えるうえで貴重な成果といえる。

また、2-2トレンチ南壁では、耕土直下の床土から地盤層までが畦造成時に切土されている状況が見てとれる(図版2・3)。耕土直下から掘り込まれた畦と並行する碎石の暗渠も検出しており、近代の造成によって現行の直線的な地割りが形成されたことが分かる。調査地ではこの直線的な地割りと曲線的な地割りが混在しており、後者は当地の元の地形をある程度反映している可能性がある。

(2) 4トレンチ

4トレンチでは互いに切り合いの関係にある土坑や溝が多く検出され、生活に伴い発生する廃棄物の集積場のような様相を呈していた。出土した遺物からこれらの土坑群は平城Ⅳ～Ⅴ並行期に集約

し、比較的短期間のうちに人々が集住する区域が形成され、遺棄されたことが分かる。また、遺物包含層掘削中の排土から出土した鳥紐蓋は全国的にも出土例が少なく、都城や国分寺からの出土が目立つことから、一定階層以上の人物との関わりを推測できる。

既往の調査では R873 (古閑正浩・喜多貞裕・大西晃靖 2008)・R1153 (角早季子 2018)・R1212 (原田早季子 2021) 次調査において、同様の年代観の竪穴建物や掘立柱建物、用途不明土坑群が検出されており、生活痕跡が検出されてきた。とりわけ R873 次調査で検出された L 字型の区画溝からは「麻呂」、「大宅」など有力者の存在を示唆する墨書土器が出土した。地域の有力者や公権力の介入を想定させる調査成果は鳥紐蓋が出土した事実とも符合し、久保川遺跡の占拠者が一定の有力者であったことは首肯されるであろう。

(3) 5トレンチ

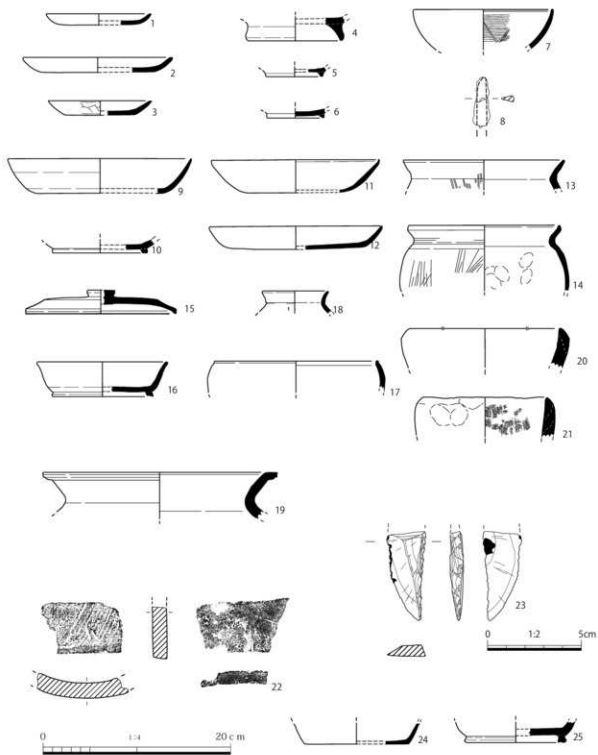
5トレンチでは古代の遺構は削平されたため検出されず、中世の溝群を検出した。地盤層を掘り込む中世の南北溝を一条検出しており、溝の廃絶後に一体が沼地化した。沼地が陸化して形成された粘土層上面に規格性の高い南北溝群が開削されている。粘土層上面には足跡状の痕跡を複数検出しており、何らかの作業を伴って利用されたことが窺える。また、溝埋土と遺構面上面の第5層からは、溝群が洪水と土石流によって埋没したことが分かる。溝群の役割については2つの可能性を提示しておきたい。1つ目は導水施設である。溝群には一方向に傾斜する状況は認められないが、これは検出した4mの範囲における測量結果に過ぎず、溝群の延長部分の構造によっては、例えば河川と接続し、流水を取り込めた可能性がある。2つ目は、畝間の溝や土地改良のための排水溝といった農耕に関連するものである可能性である。

(4) 5-2トレンチ

5-2トレンチでは5トレンチで検出した第6層を削平して、6トレンチの第6a層が堆積している状況が確認できた。また、2-2トレンチと同様に耕土直下の床土以下が畦の構築により削平されており、近代の造成により形成された直線的な地割りの田地区画であることが分かる。

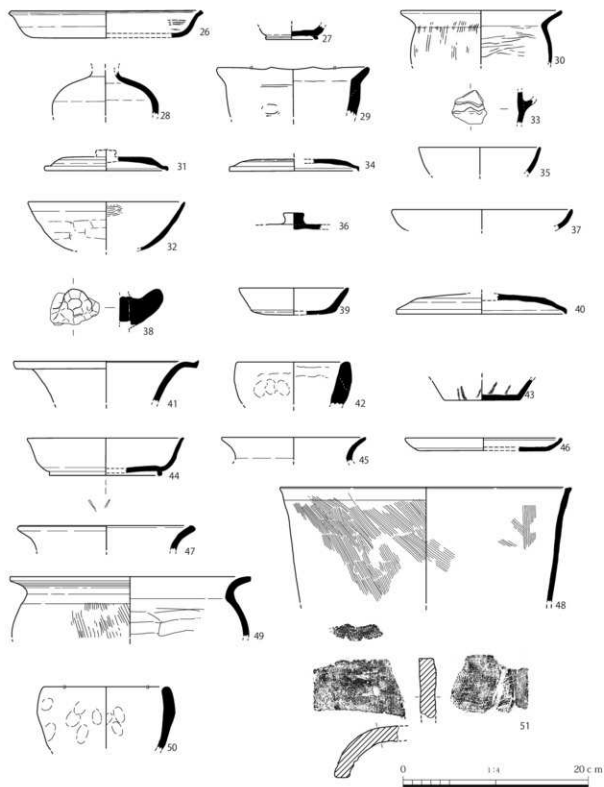
(5) 6トレンチ

6トレンチで検出した整地遺構 SX610～620 は、地盤層上面に施された整地遺構である。このうち、SX612、SX614、SX615 については礫を非常に多く含み、固く突き固められている。そのため、これらの遺構をともに「礫が主体の整地遺構」と呼ぶ。この礫が主体の整地遺構の年代を考えるため、まずは各整地遺構の堆積状況と遺物の示す年代を整理したい(第20図)。整地遺構は垂直方向に3段の層を成して堆積した遺構であり、南側から北側に向けて上る緩斜面を2段形成している。水平方向には小単位で整地を重ねており、段ごとに平坦面が形成されている。礫が主体の整地遺構は SX612 の緩斜面から SX614・SX615 に連続的に構築されており、久保川に由来する垂角礫を大量に含む点、奈良時代後半の遺物を多く含む点、転圧されていて非常に堅いという点が類似する。また、整地遺構 SX610・SX611・SX613・SX616～SX619 は礫が主体の整地遺構から連続した平坦面を形成しており、礫が主体の整地遺構と一体の遺構であると考えられる。礫が主体の整地遺構からは奈良時代後半の土器が出土しており、出土遺物の大半を占める。その一方で、SX610・SX611・SX612・SX614 からは瓦



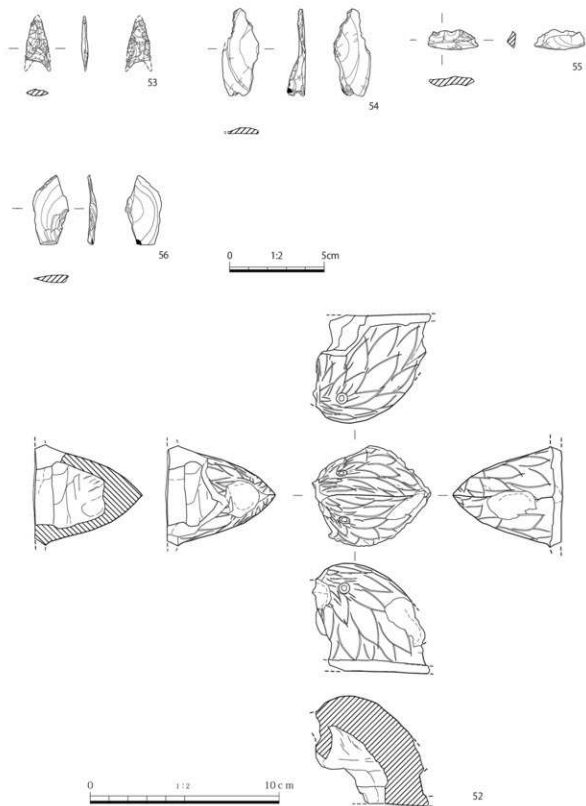
2 トレンチ SE201(1~8)、4 トレンチ 包含層 7a 層 (9・10)、4 トレンチ 包含層 7b 層 (11~23)、4 トレンチ SK405(24・25)

第 16 図 遺物実測図 (1)



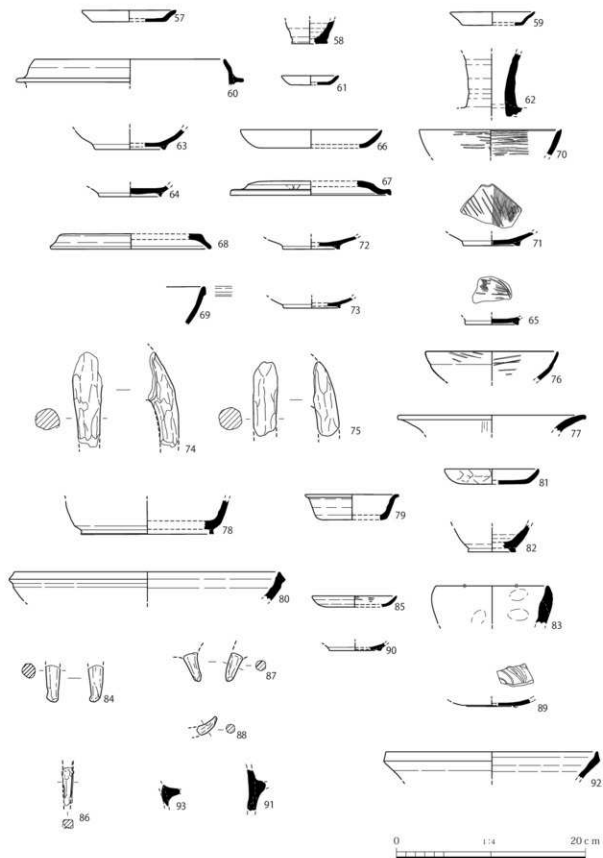
4 トレンチ SK406(26 ~ 29), SD408(30 ~ 32), SK413(33 ~ 35), P425(36), SX427(37・38), SK428(39 ~ 41), SK432(42), SK436(43・44), P438(45), SK440(46), P442(47), P4447(48), 遺構外 (49 ~ 51)

第 17 図 遺物実測図 (2)



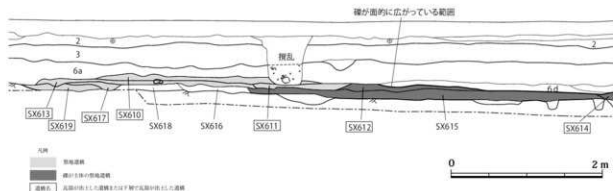
4トレンナ遺構外 (52 ~ 56)

第 18 図 遺物実測図 (3)



5 トレンチ SD511(57)、遺構外(58・59)、6 トレンチ 6b 層・6c 層(60～65)、SX610(66～75)、SX612(76)、SX613(77～80)
 SX614(81～83)、8 トレンチ SD800(84～86)、SD813(87～90)、遺構外(91～93)

第 19 図 遺物実測図(4)



第 20 図 整地遺構と礫が主体の整地遺構の堆積状況 1 : 50

器が出土している。SK602 でも瓦器が出土しており、SK602 の上位には SX613・SX617・SX619 がある。SX615・SX616・SX618・SX620 については出土遺物が少なく、いずれも小片であるため年代を推定するには十分な資料が得られていない。

次に、整地遺構全体の遺構の年代と評価について述べたい。先述のとおり、整地遺構は全体として一体的に形成された遺構であり、異なる時期の遺構が混在しているとは考えにくい。また、各整地遺構は十分な平面精査を行ったうえで掘削を行ったため、上位層からの混入の可能性は低い。そのため、瓦器が出土していることから整地遺構中世の遺構であると評価したい。奈良時代後半の遺物を大量に含むことについては、二次的な堆積を想定したい。整地遺構から出土した遺物、とりわけ土師器や製塩土器は摩耗が激しく、小片が多いことが特徴的である。また、トレンチ内で接合する遺物がほとんどない。これは、奈良時代に廃棄された大量の土器を整地の骨材として二次的に利用したことによるのではないだろうか。1～3 トレンチ、5 トレンチ、7・8 トレンチにおいて古代の遺構が削平されている状況に鑑みると、中世に行われた土地の造成によって古代の遺構が破壊され、そこに含まれていた遺物や角礫を抽出して面的に敷き詰めたとする可能性が指摘できよう。

この礫が主体の整地遺構と類似した「礫敷き遺構」が R735・R786 (古関 2006)・R884 (林・兼康保明・寺嶋千春 2007) 次調査で検出されている。当該調査においても拳大以下の垂角礫が広範囲に分布している状況が検出された。また、垂角礫に混じって奈良時代後半の土器が多く出土しており、いずれも小片であり接合しない。こうした点は R1273 次調査で検出した礫が主体の整地遺構の特徴とも類似する。一方、R735・R786 では遺構から中世を示す遺物は出土しておらず (R884 次調査の遺物に関しては時間的制約のため確認するに至らなかった。)、低地状になった部分には礫敷き遺構が施されないなど、相違点もあった。今回の調査成果でもって両者が同様の遺構であるかどうかを論じることは難しいため、今後の調査成果によってこうした遺構の広がりが検出されること、今後の研究によりより詳細な評価がされることに期待したい。

(6) 7・8 トレンチ

中世の土坑と東西溝を検出した。本トレンチ北側を走る町道西法寺里ノ後線敷設に伴う R402 次調査において、中世の耕作溝や欄干と考えられる遺構を検出しており、本トレンチの遺構もこうした中世の農耕関連遺構である可能性がある。

また、8トレンチ南西から7トレンチにかけて検出した溝は、昭和40年測図(第21図)と照らし合わせると田地の畔の位置と重なるため、畔にかかる排水溝であると考えられる。埋土から出土した中世の遺物は溝が機能していた時の混入である可能性がある。

(7) まとめ

各トレンチの調査成果から、当地の土地利用として次のことを指摘できる。

ア：古代には人々が集住し、遺物を多く消費した。占地した人々の階層は比較的高く、公的権力との関連も示唆される。

イ：中世には農耕関連遺構が広がっていた。

ウ：礫が主体の整地遺構の性格は不明であるが、中世に大規模な造成が行われたことを示している。

エ：検出される遺構の時代や性格が田地の区画ごとに異なっている。

本調査においては、地盤層の高さがトレンチによって異なった。1～3トレンチが扇状地の先端にあたり、最も地盤層の標高が高い。3トレンチから4トレンチに向けてやや標高が下がり、4トレンチと5トレンチの間には2m程度の座状の地形がある。5トレンチから6トレンチに向けては標高が下がり、6トレンチSX614の半ばから7・8トレンチに向けて標高が上がる。当該地は中世に一定規模の開発がされていることを窺い知ることができるが、こうした開発により、地盤層の標高が高い1～3トレンチでは古代の遺構が削平され、地盤層がやや下がる4トレンチにおいては古代の遺構が良好に残った。一方で、地盤層の標高が低い6トレンチでは整地遺構が施された後、水流の少ない沼状の様相を呈した。7・8トレンチは6トレンチに比して標高が高いため古代の遺構が削平された可能性があるが、旧河道が中世に埋没した可能性もある。田地の区画ごとに遺構の様相が異なっていることは、旧地形を利用して農地開発が行われてきたことを感じさせるものである。想像をたくましくすれば、中世の造成によって古代の遺物を含んだ土が切土・盛土されることによって、中世の遺構に古代の遺物が大量に含まれる状況が生み出されたとも考えられよう。そうした土地利用が、現行の久保川遺跡周辺の水路にも影響を与えている可能性がある(第21図)。古代には有力者が占地し、中世以降は旧地形をうまく利用して農地開発が行われてきたことが今回の調査から指摘できる。



第21図 久保川遺跡周辺の農業用水 1:5000

7. 鳥紐蓋の製作技法の分析と分類私案

鳥紐蓋とは、鳥の頭部を模した灰釉陶器で、奈良時代後半から平安時代前半にかけて愛知県の猿投窯跡群で生産された。長野県金鑄場遺跡で出土した鳥紐蓋が平瓶の把手と共伴しており、その把手にも鳥紐蓋と同様の羽毛表現がされていることから、平瓶の蓋として用いられ、蓋と平瓶のセットで鳥の全身が表現されていたと考えられている（第 22 図）。本節では今回出土した鳥紐蓋（以降「本例」という。）の製作技法を中心に述べ、今後の展望を記したい。

（研究史）

鳥紐蓋が資料として集成され、体系的に論じられたのは池田裕英による論考が端緒といえる（池田裕英 1994）。池田は、平城京右京二条三坊二坪及び四坪で出土した鳥紐蓋（第 25 図 11、13）と全国の出土例との比較を行った。比較対象とした資料は第 25 図 2、第 26 図 17～23 の計 8 点である。これらの資料を頭頂部の形態と羽毛の表現方法により分類し、共伴土器を類型ごとに検討した結果、それら類型が時期差を示すことを論じた。また、法量を比較することにより、後出するものの方が口径・器高ともに大きくなることを指摘している。

池田の論考以降、これを見直す研究はされていないが、出土資料の増加により、池田による類型と編年に当てはめるとやや特異な位置を占める例（第 25 図 5）が報告されている（金子健一 2019）。

（本例の特徴）

本例は 4 トレンチの包含層掘削中の排土から出土した。器形は、頭頂部から後頭部にかけて円弧を描くような曲線を描き、本来は冠羽の段が 1 段あったと考えられる。喉元は蓋部分からほぼ垂直に立ち上がり、全体として鳥類に特有な前傾気味の変勢となっている。羽毛は線刻により、目は管状の工具を押しつけることにより表現される。羽毛の線刻は右側面と左側面で向きが異なり（第 24 図）、線刻の深さも異なることから右利きの人の手により製作されたと考えられる。羽毛の表現は非常に流麗である。小型の鳥類は目やくちばしの周囲に微細な羽毛が生えているが、そうした羽毛は V 字状の線や直線で表現され、頭部の大きな羽根は曲線でのびやかに描かれる。頂部後縁付近の冠羽は細い線で表現され、右側面の冠羽と左側面の冠羽が対応する位置に描かれる。こうした羽根の種類に合わせて線刻の種類を使い分けるような描写は、鳥の羽毛を近くで観察し、かつそれを表現できてこそのものである。また、冠羽の部分は粘土を貼り足すことで器形を整えており、その器形に沿って冠羽の刻線が施され、頭部の大振りの羽毛に切れ目なく移行して全体が羽毛で満たされる。つまり、整形技術と描写の技術が対応しているといえるであろう。まさに、写實的に鳥を表現しようという意志とそれを可能にする刻線の表現技術、そしてそれに対応する器形の整形技術が全てそろって初めて可能となる造形なのである。

（本例の製作技法）

出土遺物の節で述べた観察所見から、本例の製作技法を次のように復原した。

- ①円錐形に近い形状の型に布を巻き、その周囲に粘土紐を巻いて全体形状をおおよそ成形する。
- ②型から外し、内面の粘土紐接合痕跡をナデ消す。
- ③頂部やくちばしに粘土を付け足し、外形を整える。
- ④別に製作した蓋部分を取り付け、底部を円形に穿孔する。
- ⑤内外面からナデ等により蓋と頭部を接合する。
- ⑥ケズリで内外面を調整する。内面は円周に沿ったヨコケズリ、外面は目より上をヨコケズリ、それ以下をタテケズリする。その後板状工具等によるヨコナデで調整する。
- ⑦線刻を施す。切り合いが少ないため順序は不明であるが、右側面は上半部と下半部で天地を逆転させて線刻する。

①については粘土紐の痕跡があるわけではないが、前面のワレ面に見られる段状の剥離痕跡（第23図）と、内面に残る円周状のナデ調整の必要性に鑑みると、手づくねや粘土板成形よりも蓋蓋性が高い。また、先述のとおり内面の空洞は前方に湾曲しており、内面頂部は非常に狭く、このような形状の型を用いて製作したとは考えにくい。型が湾曲しているのではなく円錐形の型で成形したうえで後頭部の粘土を付加して調整することにより空洞が前方に傾いたと考える。④については穿孔を施したのか、元々円形にくり抜かれた蓋を取り付けたのかは定かではないが、紐部分の開口部と蓋部分の開口部がびたりと一致し、ケズリ面に両者の接合痕跡が観察できることから、穴のない蓋を取り付けてから穿孔したと考える方が自然である。蓋の取り付け時には外面をナデたと考えられるが、タテケズリにより痕跡が消えている。

〔鳥紐蓋の類例〕

第25図、第26図は、鳥紐蓋として報告されている出土例の集成であり、以下に各出土例の概要をまとめた⁽²⁾。なお、本例を除き、各出土例を実見できなかった。各実測図は既刊行物の図を転載またはトレースし、概要の末尾に典拠を記した。また、鳥紐蓋とセットで用いられた羽毛表現のある平瓶については、今回は集成していない。

- (1) 第25図2 愛知県みよし市黒笹4号窯出土。8世紀第4四半期～9世紀初頭に操業していた窯跡で、久保川遺跡出土例と酷似する（図の出典：愛知県2015）。
- (2) 第25図3、4 愛知県稲沢市尾張国分寺出土。3は奈良時代後半の土坑から出土。共伴する遺物から、寺域内に鍛冶関連施設があった可能性が指摘されている。4は遺構外からの出土。（図の出典：稲沢市教育委員会2018）。
- (3) 第25図5 愛知県刈谷市石根5号窯出土。8世紀末～9世紀初頭に操業していた窯跡である。（図の出典：大西遼・尾崎綾亮・片桐妃奈子・河野あすか・中川永・森まどか2018）
- (4) 第25図6 愛知県日進市折戸110号窯出土。8世紀末～9世紀初頭に操業していた窯跡である。（図の出典：金子健一2019）。
- (5) 第25図7～10 愛知県日進市折戸84号窯出土。8世紀後葉～9世紀前葉に操業していた窯跡。（図の出典：愛知県2015）。
- (6) 第25図11～13 11は平城京右京二条三坊二坪の井戸出土。別の井戸からは「酒司」、「酒口」

という墨書のある須恵器灯蓋が出土しており、解体されたウマの四肢も出土した。13 は平城京右京二条三坊四坪の井戸出土。同じ井戸から「合酒四升」と記された木簡が出土している。宅地内には据置遺構のある建物が検出されており、公的な施設、特に酒司関連施設があった可能性が指摘されている(池田 1994)。12 は平城京左京五条四坊十六坪東南隅に面する五条条間北小路北側溝 (SD2006) 出土。「目は竹管の押圧で表現」し、「紐部下半にはへらによる幅 0.7 ~ 1.0cm の垂直方向の整形痕跡がみられる」(中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織 2013)。(図の出典: 11・13 池田裕英 1994、12 中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織 2013)。

- (7) 第 26 図 14 平安京右京六条三坊の樋口小路南側溝に想定される流路から出土。平安時代前期に位置づけられる。同流路ではイヌやオオカミなどの獣骨が出土し、動物供犠祭祀が行われていた可能性が指摘されている。宅地内には後殿・脇殿からなる左右対称の建物群が検出され、荷札木簡や習字木簡が出土した。(図の出典: 古代学協会 2004)。
- (8) 第 26 図 15 美濃国分寺伽藍南面の調査で包含層から出土。(図の出典: 大垣市教育委員会 2005)。
- (9) 第 26 図 16 愛知県日進市三ヶ所遺跡出土。遺跡の評価が定まっていないが、灰軸陶器の焼成不良品が多く出土することから、未知の窯跡か、近接する天白川への運送拠点だったのではないかと考えられている。8 世紀第 4 四半期 ~ 9 世紀初頭に位置づけられる。(図の出典: 永井宏幸 2008)。
- (10) 第 26 図 17 愛知県名古屋鳴海 275 号窯出土。8 世紀第 4 四半期 ~ 9 世紀初頭に操業していた窯跡である。(図の出典: 愛知県 2015)。
- (11) 第 26 図 18 愛知県名古屋鳴海 259 号窯出土。8 世紀第 2 四半期 ~ 9 世紀初頭に操業していた窯跡である。(図の出典: 愛知県 2015)。
- (12) 第 26 図 19 愛知県東郷町黒笹 7 号窯出土。8 世紀第 4 四半期 ~ 9 世紀初頭に操業していた窯跡である。(図の出典: 愛知県 2015)。
- (13) 第 26 図 20 出土地不詳。細い棒を押しつけて鼻孔を表現する。(図の出典: 名古屋市博物館 1987)。
- (14) 第 26 図 21 群馬県前橋市下東西遺跡出土。平安時代の竪穴住居の床面から出土した。(図の出典: 群馬県教育委員会 1987)。
- (15) 第 26 図 22 長野県諏訪市十二ノ后遺跡出土。奈良時代 ~ 中世の遺物を含む「フンド」(「住居跡、土坑などといった明確な遺構を伴わないが(中略)遺物の出土状態に意識的な行為を感じさせる」区域のこと。)から出土した。(図の出典: 長野県教育委員会 1975)。
- (16) 第 26 図 23 長野県諏訪市金鉢場遺跡出土。擾乱を受けた横穴式石室から出土した。(図の出典: 金子健一 2019)。

消費遺跡の傾向として、生産地以西では都城での条坊側溝や井戸、溝での出土が中心、生産地周辺では国分寺での出土が中心、生産地以東では竪穴住居やフンドなどでの出土である。出土点数や遺跡の性格から、広域流通した製品ではなく受注生産による製品だった可能性に加え、東山道沿いの遺

跡出土例は猿投の鳴海地区産とみられるものが多いことが従来から指摘されている（愛知県 2015）。

〔池田分類と本例の評価〕

先述のとおり、池田は『鳥紐蓋小考』の中で各出土例を比較し、次に挙げるとおり頭頂部の形態と羽毛の表現方法を元に分類を行った。

①形態

I 類：頭頂部から冠毛にかけての頂部が尖るもの。

II 類：頭頂部から冠毛にかけての頂部が平坦面をなすもの。

②羽毛の表現方法

a 型：1 枚 1 枚表現されるもの。

b 型：斜格子状に表現されるもの

c 型：無紋のもの

池田の分類を本例に当てはめると I-a となり、土器編年でいえば折戸 10 号窯式で 8 世紀第 4 四半期～9 世紀初頭に位置づけられ、4 トレンチ出土遺物の年代観とも大きな乖離はない。本例は蓋部分欠損するため厳密な比較はできないが、黒笹 4 号窯と紐部分の直径は近似値を示すため、年代が下るにつれてその直径が大きくなるという指摘とも合致する。そのため、本例は、奈良時代後半に位置づけられ、鳥紐蓋の中でも比較的初期に製作されたものであると評価できる。

〔鳥紐蓋分類の私案〕

その他の出土例を見ても、一部の例外を除き池田分類は概ね鳥紐蓋の形態的特徴と文様の特性を捉えていると評価できる。一方、製作技法の面から、それと連関する羽毛表現も含めて異なる視点での分析が可能ではないかと考えるため、ここに記したい。

まずは蓋部分の器形と内部の空間の関係であるが、蓋部分の器形と内部の空間、線刻表現が密接に関連していることはすでに述べたとおりである。製作技法の復原においては、粘土紐による整形後に鳥類特有の前傾気味の姿勢にするために後頭部に粘土を付加して整形したため内部の空間が前方に傾斜したと考えた。これはモデルとなった鳥を写実的に表現するために採用された成型方法であり、その差異は鳥紐蓋の製作技術そのものの違いを表している可能性がある。また、羽毛の表現方法について、羽毛 1 枚ごとの表現方法に加え、器形との関係を含めて分類を試みた。

①器形

A 種：喉元が蓋部分からほぼ垂直に立ち上がり、頭頂部から後頭部が円弧を描くもの。全体プロポーションは喉元を中心とした扇形を呈する。

B 種：喉元が蓋部分から斜めに立ち上がり、頭頂部から後頭部が直線ないしゆるやかなカーブを描くもの。全体プロポーションは三角形を呈する。

C 種：頭頂部が平坦で、器高が低いもの。全体プロポーションが台形を呈する。

②文様の表現方法

a 種：羽毛を 1 枚 1 枚描き、器壁を羽毛で埋めつくすもの。

b 種：羽毛を 1 枚 1 枚描くが、羽毛同士が離れていて空隙があるもの。









c 種：羽毛を 1 枚 1 枚描かず、直線のみで表現するもの。

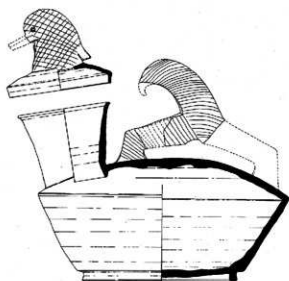
d 種：羽毛を 1 枚 1 枚描かず、斜格子文で埋めつくすもの。

上記の区分に沿って出土例を分類した(表 4)。

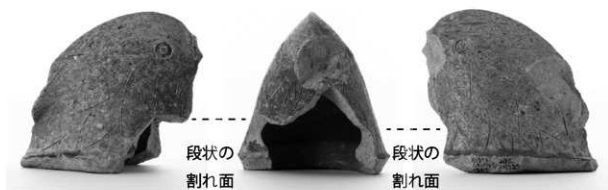
製作技法が器形に影響していること、施文方法に簡略化の傾向が見られることに鑑みると、A～C 種は製作技法の系列を、a～d 種は年代の変遷を反映しているのではないかと考えた。これは、A 種は A 種の中で a から d へと編年できるということの意味せず、技術的な系列と施文の簡略化からみた系統差と文様の分類を示したに過ぎない。例えば Aa 種の羽毛表現には曲線により描かれる桜葉状のもの(第 25 図 1・2)と、直線により描かれる菱形のもの(第 25 図 3・4)がある。この菱形の羽毛で全体を埋めつくす表現は Ad と共通している。Ad の羽毛表現は独立的に発生したというよりも、元の文様が退化・省略されたか模倣されたと考える方が自然である。そのため、Ad 種は Aa 種に連なる後出の類型である可能性が指摘できる。しかし、B 種は施文のバリエーションが多く、同一の技術者集団の中で施文方法が簡略化したというよりも、異なる技術者集団の間で同一の製作技法が共有されているといったあり方が想定できるかもしれない。その場合、文様の類型は必ずしも年代の前後を意味しない。

表 4 鳥紐蓋分類(1:6)

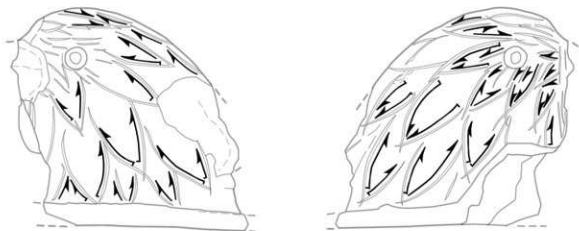
	A 種	B 種	C 種
a 種			
b 種			
c 種			
d 種			



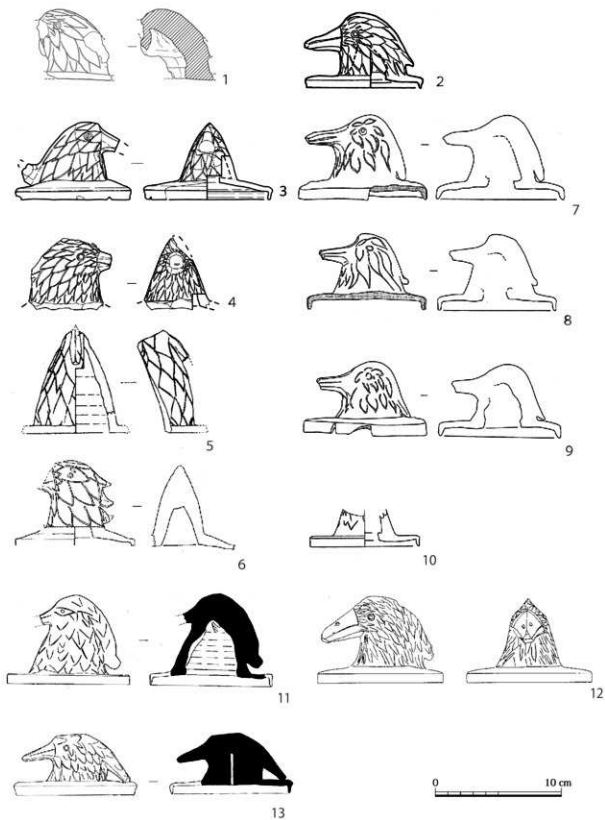
第22図 鳥紐蓋の用例復元(4:1)



第23図 段状の割れ面

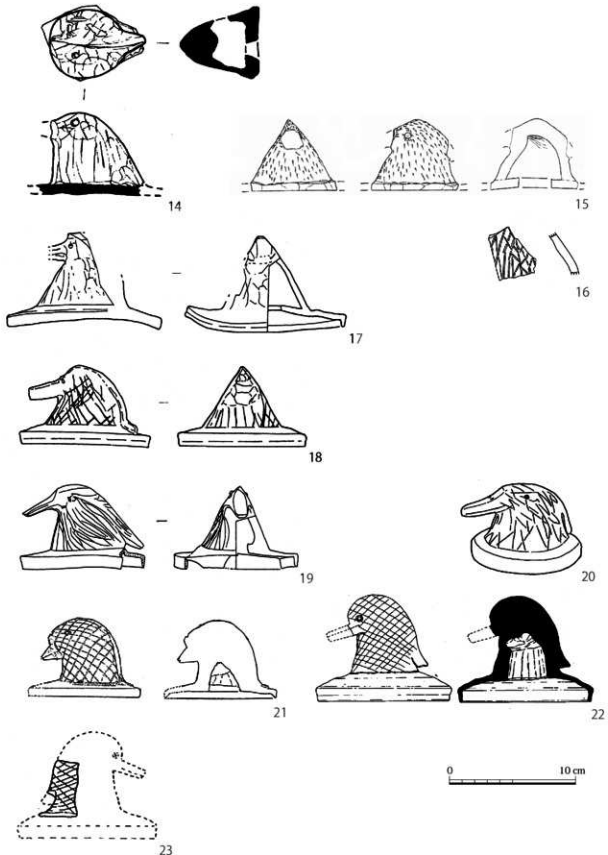


第24図 鳥紐蓋線刻方向(1:1)



1: 久保川遺跡 2: みよし市黒笹4号窯 3-4: 船沢市尾張国分寺 5: 石根5号窯 6: 折戸110号窯 7~10: 愛知県日進市折戸84号窯
11: 平城京右京二条三坊二坪 12: 平城京左京五条四坊十六坪東南隅に面する五条条間北小路北側溝 (SD2006) 13: 平城京右京二条三坊四坪

第 25 図 鳥紐蓋出土例 (1 : 3)



14：平安京右京六条三坊の樋口小路南側溝 15：岐阜県美濃国分寺伽藍南面 16：愛知県三ヶ所遺跡 17：愛知県鳴海 275号窯 18：愛知県鳴海 259号窯 19：愛知県黒笹 7号窯 20：出土地不詳 21：群馬県下東西遺跡 22：長野県金峰場遺跡 23：長野県十二ノ后遺跡

第26図 鳥紐蓋出土例（1：3）※20は写真からのトレースであり、縮尺は不明。

〔まとめと今後の展望〕

ここまで、本例の特徴と製作技法を中心に述べてきた。また、これまでに確認された出土例との比較を通じて池田分類の方向性を追認し、さらに分類方法について新たな視点を私案として示した。筆者の力量不足により出土遺構の比較検討や共伴土器の分析ができず、各出土例の詳細な製作技法の比較を行うこともできなかった。そのため、私案の妥当性を確認できず、本例の価値付けも十分ではなかったかもしれない。しかし、全国で鳥紐蓋の出土例が徐々に増えていく中、近隣で出土事例が少ないこともあり、製作技法の面からの比較分析が十分されているとはいえないように感じた。そのため、文様と外形の比較検討に加えて製作技法を比較することにより、鳥紐蓋の生産と供給の実態をより詳細に論じることができるようになると期待し、敢えて本例の製作技法を復原し、分類を試みた。今後、出土事例の増加と実物資料の比較検討により鳥紐蓋の研究が進展することを願い、欄筆したい。

〔註〕

- (1) 本調査と関連する調査として R735・R786・R884 次調査があるが、これらの調査の出土遺物を再確認の中で、いずれの調査でも動物依存体が出土していることが判明した (図版 8・2 c～e)。それらを東海大学人文学部の丸山真史先生にご覧いただき、次のようなご教示をいただいた。c はウマの歯、d はイシガメ、e は哺乳類の肋骨である。e の肋骨は湾曲が強いことが特徴的である。丸山先生と京都市埋蔵文化財研究所の関見史様にはご多用のところ動物依存体の観察方法や保存処理方法についてもご教示いただきました。記して感謝申し上げます。
- (2) 次の方々には、刊行物の提供や図面等の本書への掲載について、突然のお願いにもかかわらず快諾いただき、貴重なご意見も頂戴しました。記して感謝申し上げます (敬称略)。

田中 俊輔 (福沢市教育委員会) 田口 裕貴 (大垣市教育委員会) 永井 優香子 (刈谷市歴史博物館)

小出 佐和子 (日進市教育委員会)

[参考文献]

- 愛知県 2015 『愛知県史 別編 窯業Ⅰ 古代 鎭投系』愛知県史編さん委員会
- 池田裕英 1994 「鳥紐蓋小考-平城京跡出土例を中心に-」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1994』奈良市教育委員会
- 福沢市教育委員会 2018 『張国分寺跡発掘調査総括報告書(Ⅱ)-第15次～第19次調査-』福沢市文化財調査報告書 LXII
- 大垣市教育委員会 2005 『美濃国分寺跡-国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)-』大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 大西遼・尾崎綾亮・片桐紀奈子・河野あすか・中川永・森までか 2018 「灰軸陶器出現前後の鎭投系-1. I G-78号窯-」『三河考古』第28号 三河考古学談話会
- 金子健一 2019 『折戸(O)110号窯跡 発掘調査報告書Ⅱ』瀬戸市文化振興財団調査報告第68集 公益財団法人瀬戸市文化振興財団
- 久保清子 1994 「(5)平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査 第273・1・276次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』奈良市教育委員会
- 群馬県教育委員会 1987 『下東遺跡-関越自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集- 本文編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 古関正浩 2006 「長岡京跡右京第735次(7 ANSSR-4地区)発掘調査報告書・長岡京跡右京第786次(7 ANSSR-6地区)発掘調査報告書」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第33集 大山崎町教育委員会。
- 古関正浩 2019 「長岡京跡右京第1175次(7 ANSKN-3地区)調査報告書」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第56集 大山崎町教育委員会。
- 古関正浩・喜多貞裕・大西尾緒 2008 「長岡京跡右京第873次(7 ANSKD-3, SYB地区)発掘調査報告書・長岡京跡右京第894次(7 ANSKD-4地区)発掘調査報告書」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第37集 大山崎町教育委員会。
- 古代学協会 2004 『平安京右京六条三坊』平安京跡研究調査報告 第20輯
- 角早季子 2018 「第3章 長岡京跡右京第1153次(7 ANSSR-8地区)報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第52集 大山崎町教育委員会。
- 中世土器研究会編 『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 永井宏幸 2008 「三ヶ所遺跡-西田面遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第140集 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織 2013 「平城京跡(左京五条四坊十五・十六・四条大路)の調査 第623・631・638次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成22年度』奈良市埋蔵文化財調査センター
- 長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-諏訪市 その4- 昭和50年度』
- 名古屋博物館 1987 『館蔵品図録Ⅱ』名古屋博物館
- 奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』。
- 櫛崎彰一 1979 『陶磁体系 第五巻 三彩 緑軸 灰軸』平凡社
- 日進市教育委員会 2003 「折戸84・40・41・50号窯発掘調査報告書」日清米野木駅前特定土地地区画整理組合・米野木駅前埋蔵文化財発掘調査団
- 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』真陽社
- 林亨 1994 「長岡京跡右京第402次発掘調査概報」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第12集 大山崎町教育委員会。
- 林亨・兼康保明・寺嶋千春 2007 「長岡京跡右京第884時(7 ANSSR-7地区)発掘調査報告書」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第35集 大山崎町教育委員会。
- 原田早季子 2021 「長岡京跡右京第1212次(7 ANSSR-9地区)調査報告書」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第60集 大山崎町教育委員会。
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人 京都府埋蔵文化財研究所
- 平出紀男 1989 「緑区鳴海町字赤松所在 NN-259号窯発掘調査報告書」名古屋市教育委員会

表 3 遺物観察表 (1)

調査 番号	遺物番号	種類	形状	質量 (g)			色調 (内径)	色調 (断面)	出土	調査		調査 年度	備考	
				口径	高さ	重量				(内径)	(高さ)			
1	04	074-10201 瓦葺瓦 1号	土師器	瓦	11.0	3.2	-	赤褐色	074-10201 中層, 東, 雲	ナツ	ナツ	瓦	行蔵 14 年	
2	09	074-10201 1号 赤瓦	土師器	瓦	16.0	4.4	-	赤褐色	074-10201 中層	ナツ	ナツ	瓦	行蔵 14 年	
3	70	074-10201 1号 赤瓦	土師器	瓦	13.1	4.0	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 瓦	ナツ	ナツ, ナツ, 敷石ナツ	瓦	行蔵 14 年	
4	71	074-10201 1号 赤瓦	土師器	焼附	瓦	13.0	3.6	赤褐色	074-10201 中層, 東, 雲	ナツ	ナツ, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	
5	72	074-10201 1号 赤瓦	瓦葺	瓦	-	19.0	38.0	褐色	074-10201 中層, 西	074-10201, ナツ	074-10201, ナツ, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	
6	73	074-10201 1号 赤瓦	瓦葺	瓦	-	19.0	38.0	褐色	074-10201 中層	074-10201, ナツ, 敷石ナツ	074-10201, ナツ, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	
7	74	074-10201 1号 赤瓦	瓦葺	瓦	12.0	4.0	-	褐色	074-10201 中層	074-10201, 成道, 19年	074-10201	瓦	行蔵 14 年	
8	75	074-10201 1号 赤瓦	瓦葺	瓦	12.0	4.0	-	褐色	074-10201 中層	ナツ	ナツ	瓦	成道 19 年	
9	15	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	18.0	5.7	-	褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	瓦葺ナツ	瓦	行蔵 14 年	
10	36	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	18.0	5.0	-	内面 赤褐色 外面 赤褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201, 敷石	074-10201, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	074-10201 中層
11	10	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	16.0	5.2	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 瓦	ナツ, ナツ	ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
12	11	074-79 瓦 中層	土師器	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 瓦	ナツ, ナツ, ナツ	ナツ, ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
13	21	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	17.0	5.2	-	内面 赤褐色 外面 赤褐色	074-10201 中層, 西, 雲	ナツ, ナツ	ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
14	34	074-79 瓦 中層	土師器	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 瓦	ナツ, 敷石ナツ	ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
15	35	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	15.5	5.0	-	褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201, ナツ, ナツ	瓦	成道 19 年	
16	8	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	13.0	4.7	10.7	褐色	074-10201 中層	074-10201	074-10201, 敷石ナツ	瓦	行蔵 14 年	
17	28	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	17.0	5.0	-	内面 瓦色一層 外面 瓦色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	行蔵 14 年	
18	29	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	17.0	5.0	-	褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	行蔵 14 年	
19	33	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	15.0	5.0	-	褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	行蔵 14 年	
20	32	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	14.0	4.8	-	内面 赤褐色 外面 赤褐色	074-10201 中層	074-10201	ナツ	瓦	行蔵 14 年	
21	93	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	行蔵 14 年	
22	39	074-79 瓦 中層	瓦	瓦	15.0	4.8	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	成道 19 年	
23	91	074-79 瓦 中層	赤褐色	瓦	15.0	4.7	-	赤褐色	074-10201 中層, 西, 雲	074-10201	074-10201	瓦	成道 19 年	
24	24	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	19.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層, 雲	ナツ, ナツ	ナツ, ナツ	瓦	成道 19 年	
25	23	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	19.0	5.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, ナツ, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	
26	19	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	19.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	ナツ, 19年	074-10401, ナツ	瓦	成道 19 年	
27	30	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	18.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, 敷石ナツ	瓦	成道 19 年	
28	18	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	18.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	成道 19 年	
29	17	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	17.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ	瓦	行蔵 14 年	
30	2	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	17.0	5.0	-	内面 内面白褐色 外面 赤褐色	074-10401 中層, 西, 雲	ナツ, ナツ	ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
31	3	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
32	1	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
33	16	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	17.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	ナツ	ナツ	瓦	成道 19 年	
34	13	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	14.0	4.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
35	27	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	行蔵 14 年	
36	14	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ	瓦	成道 19 年	
37	17	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ	瓦	成道 19 年	
38	15	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	16.0	5.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ	瓦	成道 19 年	
39	6	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	14.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	行蔵 14 年	
40	4	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
41	5	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	行蔵 14 年	
42	26	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	行蔵 14 年	
43	22	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	成道 19 年	
44	21	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, 敷石ナツ	瓦	行蔵 14 年	
45	7	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ	瓦	行蔵 14 年	
46	25	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ, ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
47	8	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	行蔵 14 年	
48	92	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ, ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
49	38	074-10401 12号 瓦	土師器	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	ナツ, ナツ, ナツ	瓦	成道 19 年	
50	37	074-10401 12号 瓦	赤褐色	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401, ナツ, ナツ, ナツ	瓦	行蔵 14 年	
51	49	074-10401 12号 瓦	瓦	瓦	13.0	4.0	-	赤褐色	074-10401 中層	074-10401	074-10401	瓦	成道 19 年	

表4 遺物観察表(2)

発掘 番号	遺物種別	種類	形状	寸法(mm)			色澤(内外)	胎土	胎面		破成	保存度	備考
				長さ	幅	高さ			(内面)	(外面)			
51	40	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
52	40	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
53	47	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
54	46	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
55	47	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
56	50	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
57	47	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
58	45	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
59	46	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
60	49	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
61	49	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
62	42	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
63	47	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
64	50	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
65	41	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
66	46	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
67	43	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
68	42	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
69	58	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
70	64	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
71	52	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
72	53	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
73	54	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
74	50	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
75	51	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
76	45	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
77	56	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
78	49	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
79	59	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
80	63	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
81	41	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
82	44	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
83	57	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
84	78	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
85	82	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
86	80	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
87	76	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
88	77	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
89	80	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
90	81	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
91	43	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
92	84	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	
93	79	瓦	瓦	長	幅	厚	褐色	黄白色	黄白色	黄白色	破	破片	

圖版



1 調査前風景 (北東から)



2 調査前風景 (北から)



3 調査区全景 (北西から)



4 調査区全景 (南西から)



5 6トレンチと調査地の周辺 (西から)



6 1トレンチ地盤層検出状況 (西から)



1 2トレンチ遺構掘削状況(西から)



2 2トレンチ遺構掘削状況(西から)



3 2-2トレンチ南壁(東から)



4 3トレンチ遺構検出状況(西から)



5 4トレンチ遺構掘削状況(西から)



1 5トレンチ遺構検出状況(北から)



2 5トレンチの検出状況(西から)



3 SD502と足跡状痕跡(南から)



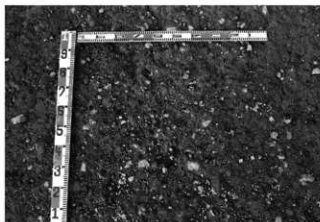
4 5トレンチ SD503と足跡状遺構掘削状況(北から)



5 5トレンチ SD505埋土(南から)



6 溝 SD506の逆級化層理と土石流(南から)



1 6トレンチSX614 (南から)



2 6トレンチ6a層上面検出状況 (南から)



3 6トレンチ礫が主体の整地遺構検出状況 (南西から)



4 6トレンチ北側遺構検出状況 (東から)



5 6トレンチ東壁 (SX612～SX613) (西から)



6 6トレンチ東壁 (SX612～SX615) (西から)



7 6トレンチ東壁 (SX614) (西から)



8 5-2トレンチ断面 (北東から)

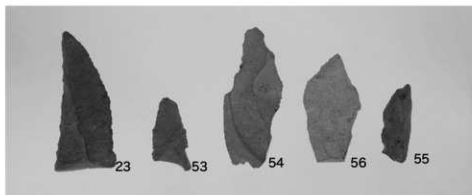


1 8トレンチ遺構掘削状況 (南から)



2 7トレンチ遺構掘削状況 (南から)

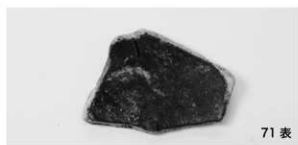
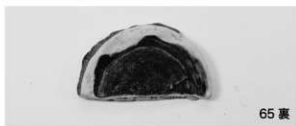
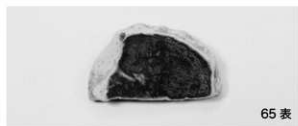




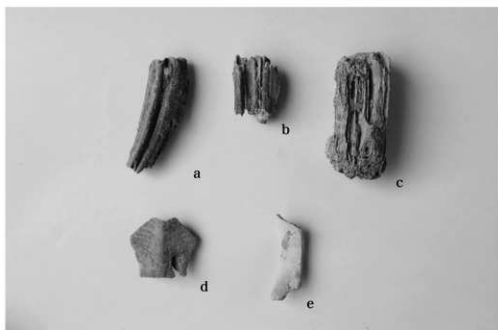
1 4トレンチ出土遺物



2 6トレンチ出土遺物



1 6トレンチ出土遺物



2 礫が主体の整地遺構・礫敷き遺構出土の動物依存体

a.R1273次調査 b.R1273次調査 c.R884次調査 d.R735次調査 e.R786次調査

報告書抄録

ふりがな	おおやまざきちようまいぞうふんかざいちようさほうこくしょ
書名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第70集
編著者名	菅生薫
編集機関	大山崎町教育委員会
所在地	〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏日3番地 電話 075-956-2101(代)
発行年月日	西暦 2024 (令和6) 年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 久保川遺跡	乙訓郡大山崎町 字円明寺 小字西法寺1-1、 2-1、3-1、4-1、 5-1、9-1、62、62 1、 小字里ノ後26-1、 26-6、27-1	26303	18 21	34° 54' 28"	135° 41' 11"	20221208 ～230330	390㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 久保川遺跡	郡城 散布地	奈良～平安時代 中世	溝・土坑・整 地遺構・柱穴	石器・土師器・須恵器・ 灰軸陶器・平瓦・動物依 存体・瓦器・瓦質土器	礎が主体の整地遺構を 検出した。 猿投産の灰軸陶器で、全 国的にも出土例が少ない 鳥紐蓋が出土した。

令和6年(2024)3月29日 印刷

令和6年(2024)3月31日 発行

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第70集

編集・発行 大山崎町教育委員会
〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町門明寺夏目3
電話 075-956-2101 (代表)

印刷 河北印刷株式会社
〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28
電話 075-691-5121
